調査地より復原工事中の東院庭園隅楼をのぞむ

研究室紹介

埋蔵文化財センター国際遺跡研究室

国際遺跡研究室は、2001年の独立行政法人化に伴って新たに埋蔵文化財センターに設置されました。奈良国立文化財研究所の時代にも、ユネスコや国が主催する文化財に関する国際交流・研究協力事業に協力してきましたが、独立行政法人化に際し、研究所設置目的の項目に、はっきりと「文化財に係る調査・研究に関する国際交流・協力等の推進」が謳われ、文化財に関する国際貢献が研究所の重要な業務分野になりました。国際遺跡研究室は、このような経緯によって設置されましたが、現在、定員1名、室長1名で運営しています。奈良文化財研究所では、主として埋蔵文化財に係わる調査・研究・保存修復・整備部門で交流を計っています。

業務は、奈良文化財研究所に係わる海外交流全般を対象としていますが、主たる業務は奈良文化財研究所が実施するすべての国際共同研究動向を把握し、研究所内外からの聴聞に応じて情報を公開することです。現在、研究所は、次に述べる7件の国際共同研究を実施しています。内3件は、中国との共同研究であり、中国社会科学院考古研究所とは、唐長安城大明宮内の苑池太液池の共同発掘調査、河南省文物考古研究所とは、鞏義市黄冶に所在する唐三彩窯跡並びに産品に関する共同研究、遼寧省文物考古研究所とは、三燕文化遺産に関する共同研究をおこなっています。韓国とは、国立文化財研究所と古代の生産遺跡と都城に関する共同研究を実施しています。以上の共同研究は、我が国の古代文化成立を東アジア世界の文化圏の中に位置づけ、その起源を明らかにすることを目的におこなっています。

カンボジアとは、アンコール遺跡保護整備局との間で協定を結び、アンコール文化遺産に関する共同研究を実施すると共に、現地若手研究者の育成にも協力しています。チリ共和国とは、イースター島のモアイ石像の保存修復に関する共同研究をおこなっています。その他、外国からの訪問者に対する対応、国際協力事業団・国際交流基金等の他機関に協力して専門家養成、研修等の事業にも係わり、東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター・業務課と提携して実施しています。

（埋蔵文化財センター　巽淳一郎）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室

遺構調査室の具体的な業務は、発掘遺構関連資料の整理・管理と遺構そのものの研究、それに建築関連遺物の調査・研究です。

前者は、発掘調査に際して作成した遺構カード・日誌・実測図、測量成果簿、空撮データ等々、要するに、発掘調査における遺物以外の成果物・情報を管理し、そのデータを駆使して遺構の研究をおこなうことです。単に発掘データの管理といっても、調査部創設以来、30年間分ありますから容易ではありません。後者は、例えば、山田寺回廊の出土部材のような、建築関連遺物の調査と研究があげられます。

遺構調査室の構成メンバーは3人。室長を除く2人は庭園と建築の専門家で、発掘調査は研究所に入所してからまさに現場たたきあげです。1年のうち3ヶ月の調査期間は、考古学専門の同僚に負けじと奮闘の日々が続きます。

また、室員はそれぞれ文化遺産研究部の遺跡研究室、同部建造物研究室を併任しているので、庭園の実測調査や古民家の調査などの仕事もあります。
そこで欠かせないのが、補佐してくれる3人のアルバイト女性陣。手際の良さは逸品で、時には室員も注意を受けてしまいます。
彼女たちの主な仕事場所は製図室。年度末は奈文研紀要をはじめとする出版物の図面作成に追われ、多忙を極めています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　箱崎和久）

遺構調査室を支えるスタッフ（製図室にて）